第 26 回アルビオン賞について

第 26 回アルビオン賞は，北川依子，木島菜々子，鈴木大介，西出良郎，矢橋知枝，山崎のぞみの 6 名から成る選考委員会により，選考対象論文 3 篇について慎重な審査を行い，矢冨弘（Hiroshi YADOMI）氏の “The Third-Person Singular Neuter Possessives in Early Modern English Sermons: A Sociolinguistic Approach to Language Practices of Early Modern English Sermon Writers”（2020 年『アルビオン』第 66 号所収）に授与されることが決定した。

矢冨氏の論文は，初期近代英語期の三人称単数中性所有格（*its, of it, thereof*）を取り上げ，宗教コーパス 2 種（The Corpus of English Religious Prose（COERP）と The Corpus of Sermons in Early Modern English（CoSEME））を用い，三世代に分類した初期近代期宗教家 25 名とその所属コミュニティ 4 種（Anti-Puritans, Conformist-Calvinists, Moderate Puritans, Radical Puritans）の言語使用を，社会言語学的視座から論じたものである。研究手法として精緻なコーパス調査がなされ，説教者の職業的・宗教的アイデンティティと 3 表現の競合関係に焦点を当てた議論が行なわれている。特筆すべきは，17 世紀前半に *of it* と共に主流だった *thereof* に関し，散発的に出現していた *its* への乗り換えおよび宗教的言語使用域での特別な社会的意味を，discourse community と community of practice との観点から論じている点である。また，discourse community レベルでの通時的推移について，説教散文の *thereof* が社会的意味として宗教的荘厳さを獲得することで 17 世紀中期の生起数減少に歯止めがかかったものの，その社会的意味が言語特性として定型化されることなく 17 世紀末に向けて衰退していったなどの主張は，説得力があると思われる。1572 年から 1692 年までの宗教家 25 名による説教文 120 万語を収録したという CoSEME コーパスは筆者の編纂によるものであり，今後の研究により一層の飛躍が期待できる点でもアルビオン賞に値するという結論に達した。